

日本知財学会 産学連携・イノベーション分科会 第1回研究会レポート

1. 作成者	原田 隆（福井大学 URA オフィス URA） 住吉 美奈子（筑波大学大学院生命環境科学研究科 博士後期課程）
2. テーマ	「民間企業と連携した URA 活動の展開～研究支援業務のアウトソーシングの可能性～」（2013 年 12 月 9 日 東京大学にて開催）
3. レポート	第1報告 井川裕之氏（早稲田総研イニシアティブ 取締役／経営管理室長） 「早稲田発、研究支援企業の生い立ちと展望」 早稲田大学における研究活動を多面的に支援、その研究成果を社会還元に貢献している。会社は研究プロジェクトの大型化および国際化、産学連携の促進による利害関係者の増大を背景にビジネスを展開・発展していった。あえて専門の会社を設立・URA サービスを提供することにより、専門人材を社員として確保、必要としている部署やプロジェクトに対して柔軟にチームを組んで対応するなど研究をより迅速かつ効率的に進め、より高い価値を産み出すための研究システムの改革の実現を可能にする。それらは大型競争的資金の確保、研究プロジェクトの運営支援活動として着実に成果を上げてきている。研究支援はフェーズ毎に研究プロデュース機能→研究マネジメント機能→研究マーケティング機能の流れにそって実施される。強みとしては競争的資金獲得支援、研究計画の策定、研究拠点の運営に対するノウハウがある。事業化支援については実績がまだ足りないと認識している。課題としては勤続年数5年～7年の社員が多数を占める組織の中で、どのように人材養成を行うか、また蓄積したノウハウをどのように組織蓄積していくか試行錯誤で取り組んでいる点をあげることができる。今後の展望として利用者（大学）が依頼しやすいように支援サービスの「パッケージ化」を進めていきたい。 第2報告 丸幸弘氏（株式会社リバネス 代表取締役） 「研究成果や研究人材を社会に送り出すしくみをプロデュースする企業 — リバネスのビジョンと活動事例 —」 理系修士号取得者以上の社員による研究経験をベースにした様々なサービスを提供している。リバネスでは研究支援は単なるサービスの提供で終わるのではなく、人材の育成および輩出まで含むべきだと考えている。そこで若手の研究人材の輩出および技術を活かせる新しい産業をつくることを目的に異なる対象に対して「科学技術をわかりやすく伝える」ことにより社会に新しい価値を生み出す「サイエンスブリッジコミュニケーター®」の育成・輩出に取り組んでいる。具体的な活動事例としてはアウトリーチ活動支援（単なる請負ではなく、活動内容を研究者自身で考えてもらう取り組み）や科学技術コーディネーター育成講座を実施、講座のあと実際に各種助成事業にチャレンジしてもらうことで即戦力となる人材養成を展開している。また平成 22

年度 エコフィールド緊急増産対策事業など産学連携による地域課題の協働による解決やベンチャー支援も展開している。リサーチアドミニストレーションにおいて「出口」をしっかりと見据えた支援をしていくことを重視している。研究のための研究ではなく、社会にちゃんと還元できる研究を伴走する形でサポートしていきたい。

感 想（原田 隆）

今回はリサーチアドミニストレーションのアウトソーシングの可能性を検討することで、逆に大学におけるURAのあるべき姿を明らかにすることを目的とした。フロアからは多様なURAの業務の中でどのような業務が中核をなすのかという質問があった。井川氏、丸氏ともに研究者の性格もふくめた生の情報の収集の重要性を指摘されていた。URAは研究者をはじめ関連部署、企業やファンディングエージェンシーなどと一緒に仕事をしていく。日常業務の中で右から左に仕事を流すようなことをなく、緊張感をもって自身のやるべき仕事をこなしていくことがURAの専門職としての存在基盤を形成するのだと感じた。その意味で外部機関と連携したリサーチアドミニストレーション活動は活動の効率化に加え、組織内に緊張感をもたらす効果も期待できるのではないだろうか。

感 想（住吉 美奈子）

「リサーチアドミニストレーションのアウトソーシングの可能性」という根本から覆すようなテーマはとても興味深かったです。早稲田総研イニシアティブやリバネスのような企業が増えていくのであれば、URAの存在価値はどこにあるのか、自分たちにしかできないことをURAの方々や大学は見つけていかななくてはならないと感じました。